

非言語コミュニケーションの教育研究領域について

水 沼 和 夫*

Referat über die Funktion und Klassifikation der nichtsprachlichen Kommunikation und deren Anwendung

Kazuo MIZUNUMA

Abstract

Die nichtsprachliche Kommunikation war in der uralten Zeit, wo die Leute keine richtige Sprache sprachen, die die einzige Austauschmittel der Informationen. Des nichtsprachliche Mittel, Mimik und Körpersprache sind im Grund ursprünglicher und manchmal erfolgreicher als sprachlichen Kommunikation. Das folgende Referat teilt als der zweite Erfolg des unsern Projekts von H.I.T. 2001 von der Funktion und Klassifikation der nichtsprachlichen Informationsmitteln und deren Anwendungen in japanischen Hochschulen und wissenschaftlichen Instituten mit.

Key words: Nichtsprachliche Information Ursprünglichkeit Eibfeld

1. 序にかえて—対象領域と分類—

「非言語コミュニケーション」とは Nonverbal Communication の和訳で、日本でもそのままノンヴァーバル・コミュニケーションと呼ばれることもある。その名の通り、言語によらないコミュニケーション行為を指すが、対象領域は必ずしも自明のものとして確定しているわけではない。最も簡素な分類例としては橋元良明による、

- 1) プロクセミクス (近接空間学)
- 2) パラランゲージ (パラ言語)
- 3) キネシクス (身体動作学) (橋元, P93f.)

の3分類がある。1) はエドワード・ホールによる命名で対話者間で調整される互いの距離や室内の空間配分などを扱い、2) は発話の際の声質やイントネーション、速度などを、3) はジェスチャーや目の動き、顔の表情など身体の動き全体を対象とする。

レイ・バードウィステルの始めた「キネシクス」は動作の最小単位を音声学の音素にあたる「動作素」と規定し、その連結体である「動作形態素」が複合してひとつの意味のある動作を構成する、とするもので、60種類におよぶ音素が実験によって収集された。しかし、現在盛んに行われているこの分野の研究においては一般的方法とは言えない。中心になっているのは比較文化論的、あるいは心理学的視点からの研究である。そのひとつ、D. モリスの著作『マンウォッチング』(1977) は最も網羅的なもののひとつで、特に「動作」については、以下の5分類、

生得動作

発見動作 (成長過程で獲得される)
同化動作 (仲間の中で無意識に獲得される)
訓練された動作 (ウィンクなど)
混合動作 (歴史的な変形)
また「ジェスチャー」についても、
偶発ジェスチャー (意識しない気分)
表出ジェスチャー (微笑, しかめ面, うなづき)
模倣ジェスチャー
形式ジェスチャー (簡略化された模倣)
象徴ジェスチャー (文化間で異なるサイン)
専門ジェスチャー (専門家グループのサイン)
コードジェスチャー (手話)

の7分類で論じ、さらに、

ジェスチャー変異 (歴史的, 地理的変遷)
多義ジェスチャー (同一文化内でも複数の意味を持つもの)
名残ジェスチャー (歴史, 幼児期の名残り)

の3つを別項目として扱っている。このうち「手話」(コード信号) については「言語体系を持っている」という理由で「非言語」伝達行為に含めない研究者もあり、議論の分かれるところである。

モリスの分類法はその成立派生過程に着目したり、機能に着目したりというものではあるが、人間の行う非言語コミュニケーション行為の多様性を見るには適している。この著作では他に以下の40近い項目が上げられている。

方言信号
バトン信号 (リズム, 架空つまみ, 指立てなど)
肯定・否定の信号
凝視行動 (時間, 視線そらし)
挨拶ディスプレイ

平成14年12月26日受理

* 総合教育センター教授

姿勢反響（親しい関係で見られる姿勢の同調）
 結合サイン
 身体接触結合サイン
 自己接触活動（セルフ・アダプター/マニピュレーションとも言う）
 非言語的漏洩（内的葛藤の表出）
 矛盾信号（相反する2種類の信号）
 不足信号（つくり笑いなど）
 過剰信号（誇張）
 地位ディスプレイ
 なわばり行動
 障壁信号（不安から生じる身体交差）
 防御行動（衝撃から身を守る姿勢など）
 服従行動（ひざまずきなど）
 宗教的ディスプレイ（宗教的忠誠心の表現）
 利他的行動（生得的なものか、議論が分かれる）
 闘争行動
 勝利のディスプレイ
 瞳孔信号（無意識に起る瞳孔の拡大縮小）
 意図運動（来客の前での椅子のひじ握りなど）
 転位活動（これもセルフ・アダプター/マニピュレーションのひとつ）
 異指向活動（感情のはけぐち）
 軽蔑信号
 威嚇信号
 わいせつ信号（性的蔑視）
 タブー・ゾーン（文化や世代間で異なる）
 過剰露出信号（通勤電車での化粧など）
 着衣信号（服装の変化が伝える情報）
 身体装飾
 性別信号（男女の自然な外的特徴）
 身体的自己擬態（身体部位が発する別情報）
 性信号（性的パートナーの選択情報）
 親信号（主に母親による育児の過程）
 幼児信号（親を引き付ける幼児の泣き笑い）
 メタ信号（動作の意味を転じる別信号）
 超正常刺激（誇張や脚色の効果）
 スポーツ行動（原形としての狩猟）
 （以上はデズモンド・モリス『マンウォッチング』，藤田純訳，小学館による。括弧内は筆者）

以上の項目はすべて先に示した橋元の3分類の内のひとつ「キネシクス」に関するものである。個人間・集団間で、公的・私的空間で行われる様々な動作から、流行などの社会現象として表れる身体的非言語情報に至るまで幅広く取り扱っている。これに対し、対人関係における「非言語的関与」に限定した場合の非言語行動の研究対象を、M.L. パターソンは以下のように整理している。

1. 対人距離
2. 凝視

3. 身体接触
4. 身体の向き
5. 身体の傾き
6. 顔の表出性
7. 話の持続時間
8. 話の中断
9. 姿勢の開放性
10. 関係性を表すジェスチャー（ここには、相手に対して、実際に、あるいは気持ちの上で望ましい関与を意味する手や腕の動きが含まれる。このようなジェスチャーの一例として、「私たち二人は」と話し手は言いながら聞き手のほうへ突き出したり引っ込めたりする手の動きが挙げられよう。）
11. 頭によるうなずき
12. 声の抑揚、話す割合、声量などのパラ言語の手掛かり

（以上は、M.L. パターソン『非言語コミュニケーションの基礎理論』工藤力監訳，誠心書房による）

握手などの「身体接触」は、別の分類例では「接触学」という分類項を成し、またモリスが1項目とした「身体装飾」は「対物理学」の領域とされることが多い。他に異文化間での認識にずれがある時間を「時間学」として一分類項に、さらには文明化の過程で人間から失われつつある嗅覚に焦点を当てた「臭い」を独立の分野としている例もある。この意味では、味覚に関係する項目も当然設けられるべきだろう。いずれにしても「パラ言語」の扱い以外は研究者間で共通しない例が多く、確立した術語とは言えないようである。これは「キネシクス」にしても同様である。

2. 非言語コミュニケーションの位置付け

人間のコミュニケーションにおける非言語情報の重要性が目される契機となった研究は、エドワード・ホルの『沈黙の言葉』（1959）『かくれた次元』（1966）だと言われている。ホールは人間の個人的・社会的空間利用の法則性を指摘し、対人距離により4種類に規定し、その各々をさらに近接相と遠方相に区分した。

1. 密接距離（0～約0.45 m）
約0.15 mまでは近接相で愛撫，格闘の距離
2. 固体距離（約0.45 m～約1.2 m）
友人との会話などの距離。約0.76 m迄が近接相
3. 社会距離（約1.2 m～約3.6 m）
約1.23 m迄が近接相，社交の場，公式の場の距離
4. 公衆距離（約3.6 m～）
約7.6 m迄の近接相は室内講演などの距離。攻撃を受けても逃げられる。（太田，p 48.）

これらの距離は物理的距離であると同時に相互関係に規定されたものであり、例えば、親密空間の「数インチ

（約 0.15 m）」は ① 簡単に触れ合える、② 相手の体熱がある程度感じ取れる、③ 体臭、香水やシェービングローションなどに気がつく、④ 相手の視覚的な姿が歪められる、という、親密な 2 者に最も相応しい距離なのである。

この研究は彼の多彩な異文化体験に結びついているが、上記 4 種類の距離空間が民族、地域、文化によって微妙に異なることも実証された。ここから「プラクシミクス（近接学）」が生まれ、社会学者、精神医学者、心理学者、言語学者らの幅広い関心と呼ぶこととなり、同時に「異文化コミュニケーション」という研究分野をも切り開くことともなった。

人間の身体表現様式と文化領域の結びつきを指摘したという点では、それに先立つ業績として、デイヴィッド・エフロン『仕種、人種、そして文化』（1941）が通常あげられる。いずれにしても、非言語情報への学問的関心は、もともと異文化間交流の問題と密接に結びついていたと言える。対人コミュニケーションにおける欧米人の多彩な身体動作と我々日本人の抑制された仕種を比較するだけでも、異なる文化間における相互理解のための障害は非言語情報の分野においても少なからず存在することは明らかだ。従って、外国語教育のなかで「非言語コミュニケーション」の教育がなされる最近の傾向は当然と言うべきであろう。

しかし、異なる母語でのコミュニケーションに伴う障害の大きさに比較するなら、過大評価すべきではないのも事実である。相手の母語を用いてこちらの意思を伝えることは、それに伴う仕種が相手にとって未知のものであったとしても、相手にとって理解可能なはずの仕種を用いながら相手にとって理解不能な言語を使用するよりは遥かに確実なコミュニケーション方法であるはずだからだ。

にもかかわらず、米国においてホールの後継者達が続々と登場した背景には、米国のような多民族多文化社会においては非言語情報の重要度が非常に高いこと、また、アメリカの世界進出にとっても異文化下の非言語情報への理解が有用であったこと、などが指摘される。

しかし、今日の「非言語コミュニケーション」への広範な関心の高まりは、異文化コミュニケーションという枠組み自体をはるかに超えたものとなっており、到底戦略的側面から説明のつくものなどではない。この潮流を生み出す上で、最も大きな影響力を持ったのはレイ・バードウィステルの『キネシクスとコンテキスト』（1970）とアルバート・メーラビアン『サイレント・メッセージ』（1971）だったであろう。人間の身体動作には言語に似た分節構造があるとして「キネシクス 身体運動学」を唱えたバードウィステルは、対面コミュニケーションにおいて言語メッセージの占める割合は僅か 35%のみであり、残りの 65%は話し方（パラ言語）や身体動作、ジェスチャー等によって占められるとした。これに続いて、

メーラビアンが、やはり実験結果に基づいて、話し手についての印象を受け手側が評価する際、その要因の 93%までが非言語メッセージ（表情：55%、音声：38%）であり、「語られた言葉そのもの」の占める割合は 7%に過ぎないことを報告した。その結果として「言語学者は、あたかもことばがメッセージを伝達したり受けとったりする唯一の手段であるかのように考える傾向があった」（ノンバーバル、195）という反省とともに後続の研究が「非言語」の領域に集中的な関心を寄せるところとなったのである。

3. 言語以前の言語

人類が言語をどのように獲得したのかはいまだ明らかではないが、その前段階として、直立歩行が咽頭位置の降下をもたらし、より複雑な音声コントロールを可能とした、とする説には説得力がある。人類は直立歩行を身に付ける過程で、それ自体は言語とは言えない「声」の大小や抑揚、微妙な調子のコントロールなどによって「敵意」「好意」「不服」「賛同」「不満」「満足」「勢力誇示」「服従」その他様々な意思や感情を伝え合い、また、急の「危険」や「驚き」また「大きな喜び」などのシグナルを交換し合ったであろう。これらの音声メッセージとともに、顔の表情、手指、腕を中心とする四肢の動き、また、身体全体を用いた様々な動作も重要な伝達・表現機能を担っていたはずである。特に狩猟の時などには物音の伴わない情報交換が必要だったと思われる。育児や協同生活を進める上でこれらによるコミュニケーションは不可欠だった。（橋元、3ff.）

音声メッセージの多くはやがて言語へと形式化されたと想像される。言語の獲得、そして文字の獲得が人類の歴史において計り知れない重要性を持つことは明らかである。また、それに伴って、非言語メッセージの比重が相対的に見て徐々に低下したことも確かだろう。しかし、バードウィステルやメーラビアンの研究は、言語獲得以前のコミュニケーション手段が現在の人類にとっても不可欠で主要なコミュニケーションの手段であり続けていることを証明することとなった。彼らの研究は、人間のコミュニケーションにおける「言語」の果たす役割の大きさについての疑問符というよりは、非言語伝達の多彩さと根源性についての指摘だと言うべきだろう。

4. 先天的にプログラムされた行動

この関連から注目されるのは、イレネウス・アイブル＝アイベスフェルトの＜プログラムされた人間＞という視点である。彼は人間の行う動作に、学習理論では説明の付かない種類のものを発見し、それを生得的なものと考えた。例えば、生まれながらの視覚障害児が、顔の表

情の基本的なレパートリーを会得したり、目の前に映し出された黒い点が徐々に大きくなるのを見せられて、生後間もない乳児が顔を背けるなどして衝突から逃れようとする行動を示したりするのは、経験的な学習によるものとは考えられない。このような人間の生得的と思われる行動は、動物生態学の成果である先天的にプログラムされた「固定的行動パターン」および一定の刺激にのみ反応する探知装置である「生得的開発機構」に結びつくもので、「部分的にはあるが」人間の行動もまた動物と同様に先天的にプログラムされている、という。これらの先天的行動パターンは社会的な相互作用のなかに見られるもので、自然状態において必然的に生じる競争的關係における安全弁的機能を果たしていると考えられている。攻撃緩和のためのニタニタ笑いはその一例だ。物を与えたり返したりするゴリラの行動は人間の対話における交替のルールに類似するもので、共に「内在的プログラムの一部」であるとされる。

また、二人の人間が出会う場合の内的葛藤のパターンについて、アイベスフェルトは次のように述べ、南米ヤノマミ・インディアンの例をあげて、これもまた系統発生的適応行動のひとつであると考ええる。

「二人の者が出会う時、両者は自分を誇示しようとする行為と、相手を慰撫し、相手とのつながりを作ろうとする行為の両方を行おうとする。これは機能面から解釈することができる。出会いの場面は、攻撃的手段が喚起されるうちは危険をはらんでいる。このため自分の弱味をみせることは、他者に支配される機会を与えてしまうことになる。自分を誇示することは、それに対する予防措置の役目をする。しかし、親しい関係を成立させるためには、両者とも友好的な意向があることを表さなければならない。(中略)祝宴に招かれよその村にやってきたヤノマミ人の兵士は、招待者の前で弓矢をもって意味ありげにはねまわって踊る。ところがこの攻撃的なふるまいは、友好的な意向を示すふるまいとうまく調和される。子供もこの兵士といっしょに、緑のヤシの葉をもって踊るからである」(ノンバーバル、126ff.)

国賓を歓迎する礼砲と子供達による花束贈呈の組み合わせも、誇示と慰撫の儀式化であり、接近反応と拒否反応の両方が同時に行われる「パターン」に、アイベスフェルトは生得性を見るのである。

こうした研究において彼が危機感をもって訴えているのは、人間が生得的なものとして本来持っていたはずの危機的状況を未然に防ぐための調整機能が、文明化の過程で徐々に失われつつあるのではないか、という点である。同様の観点から、彼は「急激な文化間の融合が、特に残り少なくなった文字をもたない文化をのみこみつつある」ことを危惧する。「われわれが社会環境を管理する方法についてもっている知識には限界がある」が、ますます少なくなりつつある文字をもたない文化には「社会

的相互作用のありのままの姿を示す資料」が残されていると言うのだ。それは同時に現代社会における人類のコミュニケーション能力にみられる欠陥の指摘でもある。

5. 名称の問題

『コミュニケーションとしての身体』の序論で、菅原和孝は非言語コミュニケーションという名称そのものについて、それが言語コミュニケーションに「従属した補助的コミュニケーションという含意を伴う」がために「あまり健全でないことは明らか」だとしている。また、彼は続く箇所で作の題名に既に示されている「言語もまた身体という単一の場の中に包みこまれた活動である」とする立場を主張しながら、近年の研究の展開について、言語という「中心」から追放された「周辺」であった身体が、今や逆に「中心」を呑み込もうとする傾向にあるのだ、と言っている。(菅原、8)

この場合＜コミュニケーションとしての身体＞は、明らかに「言語コミュニケーション」に対立する概念として位置付けられているが、「非言語コミュニケーション」と重なり合う概念として想定されているのかどうかは不明確である。勿論、「言語」対「非言語」という二元論自体に問題があることは事実で、例えば、対話やスピーチの際に用いられる、定型的な、しかし言葉が伴わずには全く意味をなさない仕種を語られた言葉そのものから分離して非言語コミュニケーションの一部とすることには異論が出されている。また、言葉の「抑揚」「音質」などは非言語コミュニケーションの要素に分類されるが、その場合非言語コミュニケーションの対極である言語コミュニケーションの「言語」とは言語のどのような形態を指すことになるのか、が問題になるであろう。つまり、冒頭で見たような非言語情報の分類は、個々の領域についての専門的研究を遂行する上で有効であったものの、コミュニケーション行為全体に対する視点や、個々の動作の相補関係への視点を失わせつつあるのだ。

それに対し、「身体という単一の場の中に包みこまれた活動」のひとつとしての「言語」という菅原のとらえ方は、「言語」と「非言語」的要素の単一性を強調したものと受け止められる。それがメッセージの全体なのであり、コミュニケーション行為のすべては人間の身体によって形式化されるのである。言語を獲得するまでの人類の長い歴史において、非言語コミュニケーションはコミュニケーションそのものだった。このことは、言語獲得から文字獲得に至る長大な期間においても同様で、人間にとって身体が唯一の多チャンネル送受信装置だった。これによって人々は視覚、聴覚、触覚、嗅覚、必要なら味覚を駆使しながらメッセージを伝えあったのである。身体こそ人間のコミュニケーションの中心をなすものだとする菅原の見解は、この点で的を射たものと言える。先

に引いたアイベスフェルトの研究は、言語以前の人類のコミュニケーション行為にコミュニケーション機能の原形を見ようとするものだった。

従って、「補助的」の意味を帯びる「非言語」という名称は本来不適切だと言える。また、これを依然として「補完的」手段にとらえる研究者がいるのも事実で、菅原の「身体行為」はこうした背景を意識した主張なのだろう。

ただし、非言語コミュニケーションという用語には、にもかかわらず、「身体行為」以上の広さを持つという長所があるのも事実である。『＜非言語コミュニケーション＞の理論的問題点』で、板場良久は「発話者不在の状態で機能する」非言語表現の例としてワシントン DC の「ベトナム戦争戦没者慰霊碑」の例に触れているが、この例に限らず歴史的モニュメントの多くは明らかに時間を越えたコミュニケーション行為を意図したものであり、それらすべてを身体行為に還元することには無理があると思われる。これは芸術は勿論その他の創造行為すべてにあてはまることだ。芸術作品はいわば非言語コミュニケーション行為の精巧な複合体と見ることができる。この場合、冒頭で見たような研究対象領域の分類が、基本的に「対面コミュニケーション」を前提としていることがひとつの障壁になるが、人間のコミュニケーションという意味では、この障壁に必然性があるわけではない。

6. 結語に代えて―国内の取り組み―

上述のような際限のない広がりには、人間のコミュニケーション行為の本質に由来するものであり、同時に、「非言語コミュニケーション」の学際的な成立過程によるものでもあろう。いまでも、社会学、言語学、コミュニケーション学、文化人類学、心理学、動物生態学、認知科学など各分野からのアプローチを受けて目覚ましい進展をみせている。

日本における非言語コミュニケーションの教育は、現在は大学院が中心となっているが、学部段階でもコミュニケーション系の学科では単独の教科として開講するのが普通になってきている。その他の学科では情報系、教育系の学科で扱われつつある。コミュニケーション論や異文化コミュニケーション論のなかで行われる例は無数と言える。また、外国語教育の中で非言語コミュニケーションを扱う例も見られる。これは、語学教師による「言語能力偏重教育」への反省とも関係していると見られる。新しい可能性をもった動きと言えよう。

しかし、視点は異なるが、早くから提唱されていた教授法への非言語コミュニケーション研究の知見の応用が未だ本格化していない現状が示すように、この学際的領域の日本国内における定着は今後の課題と見るべきだろう。

う。その意味では音楽表現、行動表現、造形表現、映像表現を非言語コミュニケーションの枠内で論じる例などは、積極性のある取り組みと評価しうる。このようなある種の試行錯誤によって広範な基礎が築かれると思われるからだ。

一方、非言語コミュニケーションの成果を応用する研究は極めて盛んで、特にロボット開発では大いに役立てられている。犬型ロボットのアイボは癒し系「動作学」で注目された。これに対し、ホンダの二足歩行ロボットアシモの最新型は「近接学」を応用している。また、2001年にスタートした「通信総合研究所」の「次期インターネット基盤技術の研究開発」はインターフェース関連技術のための「対話や非言語コミュニケーション機構解明」をテーマのひとつとし、そのモデル化研究の一環として通信相手の視線を追跡できるなど状況共有機能を持つロボットを開発している。これらは非言語コミュニケーション研究の成果を踏まえたものと言える。日本感性工学会の「ヒトを含む霊長類のコミュニケーションの研究」や京都大学の「非言語コミュニケーションの脳内メカニズム」研究などはアイベスフェルトの＜プログラムされた人間＞の視点に立ったものと言えそう。

その他、コンピュータ・グラフィックスを用いた手話翻訳も試みられるなど、従来の社会的なアプローチを超えた応用研究が盛んである。しかし、非言語コミュニケーションはもとより、コミュニケーション学そのものについての、日本独自の貢献には目立ったものがなく、基礎的研究の広がりが待たれるところである。

以上は平成 13 年度の八戸工業大学特別研究助成を受けた 2 年間のプロジェクト研究「情報コミュニケーション学の教育研究手法の開発」（大津正道、小嶋高良、水沼和夫）の調査研究をもとにした報告である。

主な参考文献

- ・『ノンバーバル・コミュニケーション』W. フォン・ラフラー＝エンゲル、本名、井出、谷林訳、大修館書店、1994
- ・『コミュニケーションとしての身体』菅原和孝、野村雅一編、大修館書店、1996
- ・『非言語コミュニケーション基礎理論』M.L. パターソン、工藤力監訳、誠心書房、2001
- ・『マンウォッチング』デズモンド・モリス、藤田純訳、小学館、1996
- ・『コミュニケーション学への招待』橋元良明編著、大修館書店、1997
- ・『コミュニケーション学入門』太田信男他、大修館書店、1994
- ・『非言語的情報の研究』酒井清、古川成司、明星大学出版部、昭和 59 年

その他、国内の教育研究状況についてはインターネットの各種ホームページを参考にした。